『古事記』の陰陽五行思想と古代樹木信仰

―『古事記』のオホケツヒメ神話を中心に―

楊　剛

一　『古事記』における陰陽五行思想の存在

『古事記』に見える、イザナミノ神が火神を産んで亡くなる段の神話に、五行思想と関わりのある現象が見られることについては、既に先学によって指摘されている。たとえば倉野憲司氏は、その著『古事記全注釈』で、ワクムスヒの神を入れて五行の「火、金、土、水、木」という五種類の元素が取り上げられており、中国における五行の考え方の影響が見られると指摘されていた。[1] しかし、この一例だけでは根拠薄弱であることを免れず、したがって、五行思想が『古事記』に事実存在していたかどうかは依然として定説化されていないのが現状である。[2] 本稿は、『古事記』序文に「乗二気之正。斉五行之序。」と、陰陽五行思想をその準則に持ち出していることから、本文にも五行思想が存在するのではないかと考え、さらに日本古代の樹木信仰がその五行思想に影響を与えているのではないかと考え、オホケツヒメに関する神話を中心にこれらの問題を検討しようとするものである。上掲の序文の語について、本居宣長は漢意（からごころ）による美辞であるとし、序文と本文との違いを指摘して『古事記』本文に陰陽五行思想が見られるという論を批判し、本文には陰陽五行の理は記述されていないとした上で、『日本書紀』と比べて『古事記』の古代神話の純粋性を強調した。だが、はたしてそうであろうか。

『古事記』のオホケツヒメ神話が非常に異質的な存在であることは先学によってすでに指摘されている。[3] オホケツヒメは農業の五穀と養蚕とに関わる神であるが、その原型は樹木信仰にあるのではなかろうかとわたくしは考えている。『古事記』ではこの樹木信仰上の神を五行の〈木〉という元素として、五行の相生と相剋の原理に結びつけたのではないかと考えるのである。

いま『日本書紀』に目を移してみよう。火神のヒノカグツチを産んで亡くなったイザナミノ神の死体から万物が生成さ

れるという話は、『古事記』だけではなく、『日本書紀』その他の書物にも記述されているが、『古事記』の記述のように五行の原理による完全な循環の環を作ったものは見えない。『日本書紀』は本文以外に多くの一書を抱えているが、本文といい一書といい、記述のなかに五行の元素とも言えるものが見えるものの、しかもどれ一つとしてこれらの元素を組織して五行の原理による循環の環を作ったものは無い。いま『日本書紀』のこの第五段の一書を整理してみると次のようである。（配列は出現の順序による。）

一書曰。（中略）次生火神軻遇突智。時伊弉冉尊。為軻遇突智。所焦而終矣。其且終之間。臥生土神埴山姫及水神罔象女。即軻遇突智娶埴山姫。生稚産霊。此神頭上。生蚕与桑。臍中生五穀。罔象。此云美都波。

一書・第二　火神カグツチ　土神ハニヤスビメ
水神ミツハノメ
（火神と土神との子）ワクムスヒ……
この神はオホケツヒメのように「頭上生蚕与桑。臍中生五穀。」とある。
○ここでは火、土、水、（木）の元素は見えるが、金は見えない。

一書曰。伊弉冉尊。生火産霊時。為子所焦。而神退矣。亦云。神避。其且神退之時。則生水神罔象女及土神埴山姫。又生天吉葛。此云阿摩能与佐図羅。一云。与曽豆羅。

一書・第三　ホムスヒ（火産霊）
水神ミツハノメ　土神ハニヤマビメ
アマノヨサツラ（ヨソツラ）
○ここでは火、水、土、（木）の元素が見えるが、金は見えない。

一書曰。伊弉冉尊。且生火神軻遇突智之時。悶熱懊悩。因為吐。此化為神。名曰金山彦。次小便。化為神。名曰罔象女。次大便。化為神。名曰埴山姫。

一書・第四　火神カグツチ
カナヤマビコ（金山彦）
ミツハノメ　ハニヤマビメ
○ここでは火、金、水、土の元素が見えるが、木が見えない。

一書曰。（中略）木神等号句句廼馳。土神号埴安神。然後。悉生万物焉。至於火神軻遇突智之生也。其母伊弉冉尊。見焦而化去。于時。伊弉諾尊恨之曰。唯以一児。替我愛之妹者乎。

一書・第六　第六書では、水門の神ハヤアキツヒノ命、木神ククノチ、土神ハニヤスノ神など万物を産んだ後に、火神カグツチが産まれている。

○ここでは水、木、土、火の元素が見えるが、金が見えない。この条は真福寺本では一書・第七の後に記されているが、「古典文学大系本」の校注者によって一書・第六に挿入されたものである。

一書曰。伊奘諾尊。抜劒斬軻遇突智。為三段。其一段是為雷神。一段是為大山祇神。一段是為高龗。又曰。斬軻遇突智時。其血激越。染於天八十河中所在五百箇磐石。而因化成神。号曰磐裂神。次根裂神。児磐筒男神。次磐筒女神。児経津主神。倉稲魂。此云宇介能美拕磨。

一書・第七　カグツチから雷神、オホヤマツミノ神、タカオカミが化成する。

○ここでは火、土、水の元素が見える。記述の方法が異なっているものの、ウカノミタマ（倉稲魂＜木＞）を入れて考えても、金が見えない。

以上のうち、一書・第二は『古事記』に見るオホケツヒメの五穀生成の話に非常によく似ている。しかし、一書・第二では日月、蛭児、スサノヲノ尊が相次いで生まれ、そしてトリノイハクスブネが生まれた後に火神が生まれるという構成になっていて、火神の前にオホケツヒメは見えない。ところがここで重要と思われることは、ワクムスヒが火神と土神との子とされていることである。というのは、『古事記』ではこのワクムスヒは火傷を受けて倒れたイザナミノ神の「尿」から生まれたミツハノメノ神の次に生まれたとされている。尿は水であるから、「水生木」の原理にしたがえば、ミツハノメノ神の次に生まれるのは＜木＞ということになり、ワクムスヒを＜木＞の神と考えていたのではないかという推定が可能になる。『古事記』ではオホケツヒメが生まれる前にトリノイハクスブネ（鳥之石楠船）が生まれていた。それを＜水＞の神としてオホケツヒメを＜木＞の神と考えていたと考えられる。『日本書紀』では水神の次にワクムスヒが生まれ、この神を蚕と桑、五穀の神としていた。これは『古事記』のオホケツヒメの話と同じである。すなわち『日本書紀』ではワクムスヒが五穀の神、『古事記』ではオホケツヒメが五穀の神となっている。さらに出生の順序で言えば、『日本書紀』では水神、（火神と土神との子）ワクムスヒ、『古事記』ではトリノイハクスブネ（水）、オホケツヒメ（木）、ホノカグツチ（火）、ミツハノメ（水）、ワクムスヒ（木）となっており、これを見ると『古事記』のオホケツヒメとワクムスヒはともに＜木＞の性の神と考えることができるとともに、『日本書紀』のワクムスヒもまた木神であると考えることができ、『日本書紀』一書・第二のワクムスヒは『古事記』のワクムスヒと同一神であり、つまりオホケツヒメと同一神で

あると考えられるのである。『日本書紀』は、その引用した資料に陰陽五行の要素は見られるが、それを陰陽五行の原理による循環にはまとめていない。これに対して『古事記』は陰陽五行の原理で繰り返し循環の環を貫き、そしてこの繰り返される循環の環の中でオホケツヒメは〈木〉の神とされ、またこれと似た性格を持つワクムスヒも〈木〉の神とされていると思われるのである。

『古事記』は『日本書紀』に比べて、万物生成の事情を五行の相生、相剋の原理によってもっと合理的に統一し、理論化したと言うことができよう。こうした過程のなかで、記・紀(原資料)ともに五穀を生成したオホケツヒメ、ワクムスヒという木神の存在を生成過程の基礎とし、とくに『古事記』に見るように、〈木〉を五行の主において、五行の相生・相剋の循環によって、神代での万物生成の大事業を完成させたのである。相生の循環の環のなかでオホケツヒメ、ワクムスヒなどという木神は循環の先頭にあって、木生火、火生土、土生金、金生水、水生木という〈木〉を始めとする循環を完成させて、五行相生の原理を実現させたと思われるのである。

たとえば、ハヤマトノ神がオホケツヒメを娶って神々を産む段においても、ハヤマトノ神は男神であるのでオホケツヒメの前に置いたが、相剋の順序はやはりオホケツヒメから始まり、これまた木神であるククキワカムロツナネノ神(久久紀若室葛根神)で完結する。イザナミノ神の亡くなる段でも、オホケツヒメという〈木〉性の神があってこそ火の神のホノカグツチが生まれ、さらにワクムスヒという木神で相生の原理による循環を完成させたのである。

二　『古事記』におけるオホケツヒメの用語例とその問題点

『古事記』にオホケツヒメの名称は六例を見るが、その表記は統一されていない。

まず原文をイザナキノ神とイザナミノ神とによる国土生成神話から例示してみよう(傍点は筆者)。

〔例1〕　如此言竟而御合、生子、淡道之穂之狭別嶋。(中略)讃岐国謂飯依比古。粟国謂大宜都比売(此四字以音)。

(『古事記・祝詞』五四頁)

〔例2〕　既生国竟、更生神。故、生神名、大事忍男神。次生石土毘古神(訓石云伊波、亦毘古二字以音、下效此也。)、次生石巣比売神、次生大戸日別神、次生天之吹(上)男神、次生大屋毘古神、次生風木津別之忍男神(訓風云加邪、訓木以音。)次生海神、名大綿津見神、次生水戸神、名速秋津日子神、次妹速秋津比売神(自大事忍男神至秋津比売神、幷十神。)此速秋津日子、速秋津比売二神、因河海持別而、生神名、

沫那芸神(那芸二字以音。下效此。)次沫那美神(那美二字以音。下效此。)、次頬那芸神、次頬那美神、次天之水分神(訓分云久麻理。下效此。)次国之水分神、次天之久比奢母智神(自久以下五字以音。下效此。)次国之久比奢母智神(自沫那芸神至国之久比奢母智神、并八神。)次生風神、名志那都比古神(此神名以音。)次生木神、名久久能智神(此神名以音。)、次生山神、名大山(上)津見神、次生野神、名鹿屋野比売神。亦名謂野椎神(自志那都比古神至野椎、并四神。)。此大山津見神、野椎神二神、因山野持別而、生神名、天之狭土神(訓土云豆知。下效此。)次国之狭土神、次天之狭霧神、次国之狭霧神、次天之闇戸神、次国之闇戸神、次大戸惑子神(訓惑云麻刀比。下效此)、次大戸惑女神(自天之狭土神至大戸惑女神、并八神也。)。次生神名、鳥之石楠船神、亦名謂天鳥船。次生大宜都比売神(此神名以音。)。次生火之夜芸速男神(夜芸二字以音也。)亦名謂火之炫毘古神、亦名謂火之迦具土神(迦具二字以音。)。因生此子、美蓍登(此三字以音。)見炙而病臥在。多具理邇(此字四以音。)生神名、金山毘古神(訓金云加那、下效此。)、次金山毘売神。次於屎成神名、波邇夜須毘古神(此神名以音。)、次波邇夜須毘売神(此神名亦以音。)。次於尿成神名、邇都波能売神、次和久産巣日神。此神之子、謂豊宇気毘売神(自宇以下四字以音。)。故、伊邪那美神者、因生火神、遂神避坐也(自天鳥船至豊宇気毘売神、并八神也。)。

(同五六頁)

〔例3〕 又食物乞大気津比売神。爾大気都比売、自鼻口及尻、種種味物取出而、種種作具而進時、速須佐之男命、立伺其態、為穢汚而奉進、乃殺其大宜津比売神。故、所殺神於身生物者、於頭生蚕、於二目生稲種、於二耳生粟、於鼻生小豆、於陰生麦、於尻生大豆。故是神産巣日御祖命、令取茲、成種。(同八四頁)

〔例4〕 羽山戸神、娶大気都比売(下四字以音。)神、生子、若山咋神。次若年神。次妹若沙那売神(自沙以下三字以音。)。次弥豆麻岐神(自陰下四字以音。)。次夏高津日神、亦名、夏之売神。次秋毘売神。次久久年神(久久二字以音。)。次久久紀若室葛根神(久久紀三字以音。)。

(同一一〇頁)

以上の表記を見ると、「オホケツヒメ」は、大宜都比売〔例1〕、大宜都比売神〔例2〕、大気津比売神、大気都比売、大宜津比売神〔例3〕、大気都比売神〔例4〕、という異なった表記で記されている。

〔例1〕と〔例2〕とは明らかに別の存在とされているように思われる。前者は島の別名であり、後者は神の名であ

る。また、〔例2〕のオホケツヒメは神であるが、〔例4〕のオホケツヒメと同一神である可能性が大きいように思われる。〔例3〕のオホケツヒメは三種の表記を持っているが同一神であるように思われる。しかし、〔例4〕に見るオホケツヒメは前の三者、とくに〔例2〕と〔例3〕のオホケツヒメとどのような関係にあるのだろうか。本居宣長の『古事記伝』もこの点に不審を持って、「其か非か」という疑問を呈し、折衷的な理解として、前二者とくに〔例2〕の分霊と考えた。分霊とする以上、相互に関係があると見ていることは確かである。

ここで『古事記』におけるオホケツヒメの登場場面と表記とその性格・行動とを整理しておこう。

	登場場面	表記	性格・行動
〔例1〕	イザナキノ神、イザナミノ神の子として。	大宜都比売	粟の国の別名
〔例2〕	イザナキノ神、イザナミノ神の子として水神の後、火神の前に生まれる。	大宜都比売神	水生木、木生火の原理で、〈水〉と〈火〉の中にあり、〈木〉の性の神
〔例3〕	ハヤスサノヲノ命に殺される。	大気都比売神 大気津比売 大宜津比売神	食物を提供すべき神。五穀の種を産出する。
〔例4〕	ハヤマトノ神の妻として子を出生。	大気都比売神	五行相剋の原理に適った八柱の、農業に関わる神々を産む。

以上を纏めて見ると、共通点としては、

(1) 登場する場面では、イザナキノ神、イザナミノ神の子である〔例1、例2〕。国神系に関わる〔例3、例4〕。

(2) 表記としては、「大」の字を持ち、また「比売」の呼称を持つ〔例1、例2、例3、例4〕。

(3) 性格としては、粟、木、植物、五穀など農業と関係する性格を持っている〔例1、例2、例3、例4〕。

などの諸点が考えられる。結論的に言えば、わたくしは〔例1〕から〔例4〕までに見られるオホケツヒメはすべて同一神に由来していると考える。しかし、この結論に至るためには、つぎに掲げる問題点を解決しなければならない。

〈問題点1〉　オホケツヒメを、〔例1〕では島、〔例2〕ではイザナキノ神、イザナミノ神の子としている。また、〔例3〕ではハヤスサノヲノ命に殺されているが、〔例4〕ではハヤスサノヲノ命の孫にあたるハヤマトノ神と夫婦になって子を産んでいる。ハヤスサノヲノ命はイザナキノ神、イザナミノ神の子であるから、この夫婦の年令差は四代にもわたることになる。

〈問題点2〉　表記について、「大」の文字と「比売」の呼称の表記が共通である以外、「気」と「宜」、「津」と「都」の表記が定まらない。

まず〈問題点1〉の島と神の問題について言えば、『古事記』ではイザナキノ神とイザナミノ神が生成した「伊予之二名嶋」は「身一而有面四」というように人格化されている。この「面四」の名前もそれぞれ人格化されて、「愛比売」の「比売」、「飯依比古」の「比古」、「大宜都比売」の「比売」、「建依別」の「別（わけ）」と呼ばれている。二神が次に生成した「隠伎之三子嶋」についても「亦の名は天之忍許呂別」、「筑紫嶋」の「筑紫国」は「白日別」、「豊国」は「豊日別」、「肥国」は「建日向日豊久士比泥別」、「熊曽国」は「建日別」と呼ばれている。「津嶋」も「亦の名は天之狭手依比売」と呼ばれている。こうした呼称は『古事記』編纂者の神話的発想による国土の神格化の意図をうかがわせるが、同時にこれらの「比売」とか「別」といった呼称を有するものをその国土の支配者とする意図をもうかがわせる。あえて言えばこれらの神格化された国土の呼称は、そのまま神の呼称として考えられるように思う。

このように考えてくると、『古事記』においてイザナキノ神とイザナミノ神の子であって島の別名として記されているオホケツヒメ〔例1〕は、イザナキノ神、イザナミノ神の子であるオホケツヒメ〔例2〕と同一神であると考えてよかろう。

〔例3〕のオホケツヒメについて言えば、『古事記』においてオホケツヒメの殺される段は、この段の出現の唐突さから、段そのものの異質性が問題とされよう。ハヤスサノヲノ命の放逐が決定され、「神ヤラヒニヤラハレル」にあたって挿入されたこの段は、五穀の起源を説こうとする意図が明らかにうかがわれる。〔例1〕でオホケツヒメは粟国の別名とされていたが、粟国といえば食物の粟が容易に連想されて、粟とオホケツヒメとの関係が考えられ、このことは〔例3〕のオホケツヒメの殺される段で、殺されたオホケツヒメの身体から蚕、稲、粟、小豆、麦、大豆が生じたということによっても裏付けられる。

さて、殺された〔例3〕のオホケツヒメと〔例4〕のオホケツヒメとが同一神であるかどうかであるが、ハヤマトノ神の系図から考えてみる。ハヤマトノ神はオホトシノ神がアメチカルミヅヒメを娶って産んだ神である。そしてオホトシノ神はハヤスサノヲノ命がオホヤマツミノ神の女カムオホイチヒメを娶って産んだ神である。オホトシノ神と同父母の兄弟としてはウカノミタマノ神がある。イザナキノ神の子であるこのハヤスサノヲノ命が天界から放逐される時にオホケツヒメを殺したのである。イザナキノ神とイザナミノ神との間に

生まれたオホケツヒメはハヤスサノヲノ命とは兄妹の関係にあるので、もし〔例4〕のオホケツヒメを〔例2〕のオホケツヒメと同一神として記述すると、ハヤマトノ神とオホケツヒメとの年令差が不自然なものとして顕在化してこよう。『古事記』は系統を重視し、系図を大切にする性格が非常に強い。したがって、ここに述べたような不自然な関係を系図に記すならば、『古事記』の系図そのものに対する信頼感をそこなうことになる。それで『古事記』編纂者は、このもともとは同じ伝承上のオホケツヒメを、系統上の不自然さを無くし、合理性を強調するために、〔例1〕のオホケツヒメを島の神として単独の神とし、〔例2〕と〔例3〕のオホケツヒメを食物の神として同一神とし、そして〔例4〕のオホケツヒメをまた別個の神としてハヤマトノ神と結婚させて、四季と灌漑を管理する農業の神々を生成させたのである。つまり、同一神を三人のオホケツヒメに分けて登場させ、それぞれが初登場する時に「此――字以音」というような注を付けたのであろう。たとえば、〔例1〕の「此四字以音」、〔例2〕の「此神名以音」、〔例4〕の「下四字以音」というように音注を付けて、それぞれを初出の神とし、前出のものと区別させようと意図したものであろう。しかし、〔例1〕、〔例3〕はともにこの神が五穀と関係のあることを語っているし、〔例2〕では直接には作物との関わりを述べていないものの、木神としていると思われる以上、五穀と農業との関係も考えられるところである。そして〔例4〕については農業、五穀に関わりの深い四季と灌漑の神を生成した神として、〔例1〕、〔例2〕、〔例3〕のオホケツヒメとの性格の一致を認めざるを得ないのである。

『古事記』がオホケツヒメについて、もともと同じ神、同じ伝説であったものをことさらに三神、三種の存在にしたのは、記述の内容、ストーリーの必要からのものであったが、同時にこの神が五穀の神であり、農業の神であり、また樹木の神であることをも述べようとするためではなかったかと考えられる。

五穀と樹木との関係について、中国の古代神話には「五穀樹」の記述が見られる。清時代の『堅瓠続集』は『異識資諧』の記述を引用して次のように記している。

園有五穀樹。一樹而兼五種。為五穀豊歉之徴。如其年麦熟則発麦葉。黍熟則発黍葉。五穀皆然。（袁珂編著『中国神話伝説詞典』上海辞書出版社刊、一九八五年六月）

つぎに〈問題点2〉の表記について考えよう。

『古事記』に見えるオホケツヒメは、上述したように三神に分けて考えられているようであるが、表記としては三種類以上の表記を有している。〔例2〕と〔例3〕のオホケツヒ

メは明らかに同一神と思われるのであるが、表記には異なるところがある。しかも〔例3〕では同じオホケツヒメの表記が三度見えて三度とも異なっている。すなわち、〔例2〕では「大宜都比売神」、〔例3〕では「大気津比売神」「大気都比売」「大宜津比売神」というように四度その名が見えて四度とも表記が異なっている。さらに「大宜都比売」〔例1〕、「大気都比売神」〔例4〕とあるのを加えて六種類の表記が見られることになるのであるが、それらの違いを「津」と「都」、「気」と「宜」の四つの文字の組合せに絞って考えてみよう。

問題はまず六種類の表記の読み方から明らかにしなければならないが、通説としてはいずれも「オホゲツヒメ」と訓まれている（『古事記大成』平凡社。）古代日本語の音韻については、「都」は「ト」の清音（甲類）また「ツ」の音、「津」は「ツ」の音。「宜」は「キ」「ケ」の濁音（乙類）、「気」は「キ」「ケ」の清音（乙類）また「ケ」の濁音(乙類）であったと言われている。この点だけから言えば、「宜」と「気」の二種類の文字を用いて表わされている「大宜都比売」「大気都比売」は「オホゲツヒメ」とも「オホケツヒメ」とも読み得るわけで、いずれの読みを採るかは別の観点から決めなくてはならない。わたくしは「オホゲツヒメ」とは読まずに「オホケツヒメ」と読むことにしている。『古事記』全巻を通して見ると、「ゲ」の音を表わすのには「宜」の文字を多く用い、「気」の文字を用いているのは「オホゲツヒメ」の場合だけであるということもその理由の一つではあるが、そのもっとも大きな理由については以下の叙述で明らかにしたい。

はじめに「津」と「都」の用字について検討する。

「津」と「都」の用法について『古事記』ではそれぞれ一定の接続の規則が見られる。それは、「津」は訓仮名文字に接続し、「都」は音仮名文字にだけ接続するということである。「津」について言えば、『古事記』には「津」の文字の用例が多く見られるが、その接続を見ると「天津日継」「湯津楓」「湯津香木」「胸形之奥津宮」「中津宮」「辺津宮」「秋津嶋」「底津綿津見神」「夏高津日子」「闇津見神」「大山津見神」「黄泉津大神」などのようにいずれも訓仮名文字の下にしか接続せず、そして上の語を下に来る語の修飾語とさせる文法上の助詞としての役割を果たしている。「都」について見ると、有意文字としては『古事記』では「都邑」「都不知」「都不得一魚」「都勿修理」の四例が見られるだけで、これ以外にはもっぱら仮名として用いられている。仮名として用いられる「都」は「津」と同様の文法上の役割を果たしているが、たとえば「伊都之尾羽張」「建布都神」「志那都比古」のように音仮名文字の下にしか接続しないのであ

る。このような「津」と「都」の使用慣習は『古事記』の用字法の特色の一つである。とは言っても、『古事記』にイザナキノ神、イザナミノ神の子に「風木津別之忍男神」という神がみえる。この神の読み方について、『古事記』の本文には「訓風云加邪、訓木以音。」という割注が付けられている。『古事記』の一般的な読み方にしたがえば「風木津別之忍男神」の「木」は「キ」もしくは「ケ」と読まれる可能性のあることから、そう読まれることを懸念しての注記ではないかと思われる。現在、「木」の文字の読み方には訓読みの「キ」、音読みの「モク、ボク」があるが、当時の読み方としては「キ」「ケ」という読み方しかなかったのではないかと考えられる。ちなみに中国では現在、「木」の文字を〔mu〕、すなわち「ム」と発音している。古典文学大系本では、この割注を異例の注として、試みに「風木津別之忍男神」の「木」を「モ」と読ませている。すでに述べたように、「津」という文字は訓仮名文字の下にしか接続しないという表記の慣習があるから、「モ」は訓ということになるのだろうか。『古事記』が「訓木以音」とことさらに注しているのは、この「木」の文字の読み方をとくに問題視してのことと思われるが、「津」の文字の接続法についてもなお考えるべき余地を残しているように思う。[4] ここで付言しておくと、『古事記』ではイザナキノ神、イザナミノ神の子の木神「久久能智神」、ハヤマトノ神とオホケツヒメの子の「久久紀若室葛根神」などの神名の「ク」と読まれていることばはいずれも樹木と関係しているものと思われるが、表記としては「木」の文字は用いられていない。

つぎにオホケツヒメの表記に見える「気」と「宜」の文字について検討してみよう。『古事記』で「気」という文字が有意文字として用いられているのは「混元既凝、気象未效」「未移浹辰、気沴自清」「乗二気之正、齊五行之序」「於吹棄気吹之狹霧」「神気不起」の五例であり、五例はいずれも漢字の「気」の意味を示していると思われ、その音も「キ」とするのが一般的である。音仮名文字としての「気」の用例はたとえば「豊宇気毘売神」「建豊波豆羅和気」など多く見られるが、しかしそれらはいずれも「ケ」と発音するものとされており、「ゲ」と発音されるものは「オホゲツヒメ」の場合以外にはないことになる。「宜」について言えば、表音文字としては「牟宜都君」（ムギツ君）、「比登母登須宜波」（一本スギハ）、「佐佐宜郎女」（ササゲノ郎女）、「志良宜歌」（シラゲ歌）、「岐佐宜集而」（キサゲ集リテ）、「爾宜能煩理斯」（ニゲ登リシ）などとあって、「ギ」「ゲ」と読まれている。すなわち、「大気都比売」であれば「オホケツヒメ」「オホキツヒメ」、「大宜都比売」であれば「オホゲツヒメ」「オホギツヒメ」といった読みが考えられるわけで、し

かも『古事記』に両方の用字が見られる以上、いずれの読みをよしとするかはその意味するところから考えて決めなければならないのである。

いま、これらの用字についての内容的な問題に入る以前に、改めて「オホケツヒメ」の表記について整理してみると、

大宜都比売〔例1〕　大宜都比売神〔例2〕
大宜津比売神〔例3〕　大気津比売神〔例3〕
大気都比売〔例3〕　大気都比売神〔例4〕

とあり、この諸例を前述の接続の規則に照合させると、

大宜都　「大」音訓み　「宜」音訓み　「都」は音仮名文字に接続
大気都　「大」音訓み　「気」音訓み　「都」は音仮名文字に接続
大宜津　「大」音訓み　「宜」音訓み　「津」は訓仮名文字に接続
大気津　「大」音訓み　「気」音訓み　「津」は訓仮名文字に接続

となって、「大宜津」「大気津」という表記は音仮名文字に「津」が接続している点で『古事記』全体の表記の慣習に合わないものになる。ただし、「大宜津比売神」の表記について諸本は「大宜津比売神」という本文を採っているが、真福寺本『古事記』と『校訂古事記』には「大宜都比売神」とあって、真福寺本を重視する立場を採れば、問題が残るのは「大気津比売」の表記のみということになる。

そこで「大気津比売神」という表記について考察する。『古事記』では「気」と「食」の文字が同音とされている例が見える。下巻には「豊御気炊屋比売命」が「豊御食炊屋比売」とも表記されている。オホケツヒメの用語例の〔例3〕に見える「大気都比売」「大気津比売神」の表記は、オホケツヒメが五穀農業に関わっていることから、それまで用いられてきた「大宜都」（オホゲツ）の表記を避けて、『日本書紀』にみる保食神の「ウケモチノ神」（飯田武郷著『日本書紀通釈』には『和名抄』の「宇気者食之義也。言是保持食物之神也。」の文を引用している。）の「ケ」（食）の連想による「気」文字を使用したのではなかろうか。つまり、オホケツヒメを「保食神」と同じような存在にしようとする意識が『古事記』の編纂者にあったのではないかと思うのである。〔例3〕に見る「大気津（都）比売」という表記は〔例1〕、〔例2〕に見る「大宜都比売」（オホゲツヒメ）の表記から〔例4〕の「大気都比売」（オホケツヒメ）の表記に移行する過程のものではなかっただろうか。「大宜津比売」という『古事記』の表記慣習に合わない表記の存在を認めるとしても、これも『古事記』初出の「大宜都比売」という表記に惹かれての表記ではなかっただろうか。

真福寺本『古事記』の原本には、この段の欄外に「五穀生始事」という注記がある。この注記は、この段のオホケツヒメの表記の問題に気付いたであろう読者（転写者）に、オホケツヒメと保食神との関連性、「オホゲツヒメ」から「オホケツヒメ」への表記の変化、さらには表記習慣に合わない表記の由来について考えさせたであろうことを思わせるのである。

ところで、『古事記』の編纂者がオホケツヒメが保食神と関わることを考えていたとすれば、何故始めから「オホケツヒメ」を「豊御食炊屋比売」「御食津大神」の例のように「大食津比売」と表記しなかったのであろうか。わたくしはここでも「特別な配慮」がはたらいていたのではないかと考えるのである。

「ケ」という音を表わすのには、また「木」という文字がある。たとえば『古事記』でイザナミノ神が火神を産んだために火傷を負い亡くなったのをイザナキノ神が「易子之一木乎。」と言って悲しみ嘆くが、この「一木」を「ヒトツケ」と読んでいる。また、『釈日本紀』十の「風土記逸文」に、

筑後国風土記云、三毛郡云々。昔者、棟木一株生於郡家南。其高九百七十丈。朝日之影蔽肥後国山鹿郡荒爪之山云々。因曰御木国。後人訛曰三毛。今以為郡名。

とあり、「御木」を「ミケ」と読んでいる。

『古事記』がオホケツヒメと保食神との関わりを一方に考えながら、しかも「大食津比売」のようには表記しなかったことについて、わたくしは「ケ」の音にイメージされる「木」の意識を重視したためではないかと思っている。

『古事記』のオホケツヒメはその事績から見ても木の神とされる性格が強かった。オホケツヒメは女性とされるが、女性は桑と蚕と深い関係を持つ。中国の神話にも「桑に死ぬ女」とか「馬頭娘」とか、女性と桑、蚕との関係を示す伝承が多い。そしてこの類の神話は必ず樹木信仰に繋がっている。というのは、桑そのものが樹木であるからである。

『古事記』と『日本書記』に見るオホケツヒメの話とワクムスヒあるいは保食神の伝承とはどちらも桑と蚕、そして五穀と関連している。このような点からもこれらの伝承と樹木信仰とが関わっていることを知るのである。『古事記』の編纂者がオホケツヒメを「大食津比売」というような表記で記述することをせず、オホケツヒメと「食」との関係をことさら希薄に記述しようとしているかに思われることは、『古事記』でのオホケツヒメが陰陽五行に関わり、またオホケツヒメの「ケ」が五行の中の〈木〉に関わっていることへの配慮によるものではなかったかとわたくしは考えている。すなわち、オホケツヒメは五行の中の〈木〉神であり、言うならば「大木津比売」といった意識が潜んでいて、「食」との関係

を先入観として与えてしまうことを避けようとしたために、「大食津比売」といった表記を採らなかったのではなかろうか。

すでに「風木津別之忍男神」について見たように「木」の文字にはその読み方に不安定さを伴うことが懸念される点があり、また「木」と「食」とのいずれかへ意識が偏ってしまうことへの懸念もあって、オホケツヒメの「ケ」を表わすのに「気」の文字を用いたのではなかろうか。「木」と「気」はその相通ずる意味から、用字において「木」を「気」で表記しても大きな違和感は感じられない。『古事類苑』植物・金石部一には貝原益軒の『日本釈名』の文を引用して「木。いきなり、生きるなり。又気のをひ出る意。」と記している。さらに「木」を「ケ」と読み、「き（木）」の意味を示す例はスサノヲ神話にも見える。また、『古事類苑』植物・金石部には『東雅』十六、樹林のことばを引用して「素戔嗚神、出雲国に天降りまして、韓郷の島は金銀あり。吾児しらすべき国として浮宝あらず。かれよからじとのたまひて鬚髯の毛を抜き散らして、杉、檜、櫲樟、被となし給ひ、また噉ふべき八十木種をば、みな能播生（しきはや）さる。五十猛神、妹大屋津姫、抓津姫神三種の神、又八十種の木を分ち布き、紀伊国に渡し奉る。即此国に所祭の神是也、と旧事紀日本紀に見えたり。上古の俗、木を呼でケと云ひしも、亦此等の義によれりと見えたり。」とある。またハヤスサノヲノ命が斬り殺した八岐大蛇の身にかつらなどを生じ、松、柏、梢、檜が生じたことも皆「毛」より化生したという発想だとしている。契沖の『円珠庵雑記』にも「木（キ。ケ）むかしはけといふ。すさのをのみこと身の毛をぬきて授け給へるが、さまざまの木となる故なり。」とあり、頭書に、『日本書紀』神代巻の一書の「素盞嗚尊曰。韓郷之島。是有金銀。若使吾児所御之国。不有浮宝者。未是佳也。乃抜鬚髯散之。即成杉。又抜散胸毛。是成檜。尻毛是成柀。眉毛是成櫲樟。」とあるのを引用している。

「気」が「食」に関わることについてはすでに「豊御気炊屋比売命」が「豊御食炊屋比売命」とも記されている例を挙げ、また「木」が「ケ」と読まれていることについては『古事記』『風土記』逸文の例を挙げておいたが、さらに「気」の表記で「木」を言う例を『万葉集』から挙げてわたくしの考えを補足しておこう。

まけばしら（麻気波之良・真木柱）　ほめて造れる殿のごと　いませ母刀自　面変りせず

（『万葉集』巻二〇・四三四二）

松の木の（麻都能気乃）　並みたる見れば　家人の　われを見送ると　立たりしもころ

（同　・四三七五）

三　オホケツヒメと陰陽五行の相生、相剋

オホケツヒメは上述のように木の神であるから五行の原理に従うべきものとされている。オホケツヒメの〔用例2〕ではイザナキノ神とイザナミノ神が大事忍男神以下、土石風木、山野河川など自然界の神々を産み、さらに、トリノイハクスブネと、オホケツヒメとヒノヤギハヤヲを産んだ。そしてイザナミノ神は火傷を受けて倒れ、その倒れた身体から相次いで金山毘古など六柱の神々が生成される。すなわち、

カナヤマビコ　カナヤマビメ　ハニヤスビコ
ハニヤスビメ　ミツハノメ　ワクムスヒ

の六柱の神である。この六柱の神に、その前に生まれたトリノイハクスブネ、オホケツヒメ、ヒノヤギハヤヲの三柱の神を加えて見ると、イザナミノ神の出生した神々は五行の相生の原理に象る循環をなしているものと思われる。

春　木　トリノイハクスブネ　オホケツヒメ
夏　火　ヒノヤギハヤヲ
秋　金　カナヤマビコ　カナヤマビメ
土　ハニヤスビコ　ハニヤスビメ
冬　水　ミツハノメ
春　木　ワクムスヒ　トヨウケビメ

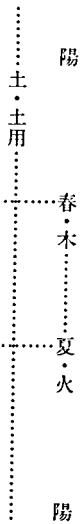
この循環のなかの〈金〉と〈土〉との位置を替えれば完全な五行の相生の循環（木、火、土、金、水）になる。トリノイハクスブネは『古事記』のこの箇所では水性の神としているが、五行の原理にしたがえば相生の循環は木から始まるとするところから、この天鳥船という別名を有するイハクスブネはやはり木の所属に入れるのが妥当と思われる。ワクムスヒからさらにつぎの循環が始まると思われるが、このワクムスヒの子はトヨウケビメノ神である。このトヨウケビメノ神は『祝詞』の大殿祝詞に見えるヤフネトヨウケヒメノ命（屋船豊宇気姫命）にあたる神で、稲霊とされているが、同『祝詞』ではヤフネククノチ（屋船久久遅）命を「木霊」としていることから、このトヨウケビメノ神も木の神であることが認められよう。さらにこのことから、トリノイハクスブネノ神もヤフネククノチノ命と同じく、「木霊」に属することが裏付けられよう。

しかし、なぜここで〈金〉と〈土〉との位置が入れ替わっているのか、この点について考察してみる。

このことを理解するためにまず次の記述を引用しておこう。吉田兼倶の『中臣祓抄』では「陰陽乱而為霧」を解説して次のように言う。

其ユワレハ秋ヨリ冬ヘウツルモ金生水ト相生スルソ。冬ヨリ春ヘ移モ水生木ト、春ヨリ夏ヘ移モ相生也。夏ヨリ秋ヘ移レハ火剋金ト相剋スルソ。故ニ秋ハ陰陽乱為霧也。

陰陽の原理によれば春夏の二季は陽とされ、秋冬の二季は陰とされる。夏は火の属性で秋は金の属性とされる。したがって春夏という陽から秋冬という陰に替わる場合、夏から直ちに秋に替わるという現象となって現われるが、そのことは「夏より秋へ移れば火剋金と相克する」理に相応する。こうした四季の運行を図に示すと次の図になる。



『古事記』のイザナミノ神が神々を出生する段で〈金〉と〈土〉の位置が違っていたことは、イザナミノ神の「神避」に直接関わっていたのではないかと思われる。上述の『中臣祓抄』の他に『皇天記』が引用する「名越之祓」にもこのような四季の変化を五行相剋の原理で説明している。次のようである。

六月尽也。夏秋交代之候也。夏火、秋金、火与金相克。故越夏之名、攘相克之災。坤方土用之儀、可思量也。

陰陽五行の理によれば、春夏は陽、秋冬は陰。夏・火の陽から秋・金の陰への変化は陰陽の相剋によって、「火与金ト相剋スル」ことによって完成するものとされるのである。一方、五行の原理によれば、また自然の運行の順序によれば、四季の変化は春夏秋冬という順序であり、この順序は五行の相生の循環にあたるものとされる。すなわち、春は〈木〉、夏は〈火〉、秋は〈金〉、冬は〈水〉、それに春夏秋冬の各季節の間に土用の〈土〉を入れて、五行の順は「春、土、夏、土、秋、土、冬、土、春」という循環になるはずである。この循環のなかで一番重要なのが土用の〈土〉そのものである。このような〈土〉重視の思想が『古事記』に存在していることが指摘されるのである。

『古事記』では〈土〉を非常に大切にしている。『古事記』序文には「孕土産島」ということばも見え、イザナキノ神、イザナミノ神が国生みを終えて次に神々を産む時も一番先に産んだのはオホコトオシヲノ神で、その神につづいて生まれたのはイハツチビコノ神（石土毘古神　訓石云伊波、亦毘古二字以音。下效此也。）、イハスヒメノ神（石巣比売神）などの〈土〉の神々であった。このほかにも「天之狭土神」とか「国之狭土神」といった「土」という文字を有する神が多く見られる。

『古事記』では〈土〉を重視するとともに、〈土〉と〈火〉との関係をも非常に重視している。火神ヒノヤギハヤヲは別名をヒノカグツチノ神（火之迦具土神）と呼ばれ、〈土〉と関わる名前となっている。これは五行の原理の「火生土」という相生の循環の具現化した現象と言えよう。こうした現象

は他にも見られる。

イザナミノ神の死後、その身体から八雷の神(鬼)が化生した。この八雷は、雷と言ってもその実は「火雷」と「土雷」しか実体のある神とされていない。他の六雷は、それぞれの名称が示しているように「大雷」とか「黒雷」とか「拆雷」とか「若雷」とか「鳴雷」とか、また「伏雷」といったもので、「火雷」や「土雷」のように火や土といった実質を持ってはいない。言うならば具象性の無いものであった。これら具象性の無い雷は「火雷」や「土雷」という実体を有する雷のいろいろな状態下での様態表現であると言えるものである。

火神の別名が「火ノカグ土」であることも〈火〉と〈土〉との緊密な関係をうかがわせる。イザナミノ神の身体から生まれた八雷の実質が火と土でしかなかったことは、むしろ理に適った、理解し得ることであった。火神が土と関わることは、火神自身が土そのものであるという『古事記』に見られる意識にも明らかで、火神のヒノカグツチノ神が父親のイザナキノ神に殺された後、その身体から土や山やなど〈土〉の性質を持つ神々ばかりを産んだことも「火生土」の五行の原理に適っている。このことはまた自然界の実態にも合うものである。焼畑農耕では火の作用によって雑草灌木が消えて畑が生まれる。『古事記』はこの自然の道理に合う事実を陰陽五行の相生の原理によって理論化しただけである。

火と農業の焼畑作業とは直接に結びつき、火の発生と雑草、樹木の死によって畑の開墾が進み、完成し、農業の繁栄が訪れて来る。このような過程がイザナミノ神の化生神話と繋がったものと思われる。

『古事記』はイザナミノ神の産んだ神々にうかがわれる五行相生の循環を〈土〉と〈金〉との順序を替えることによって未完成なものとしている。これこそが『古事記』独特の理解の存するところではなかっただろうか。

『古事記』では、イザナミノ神が火神を産んだすぐ後に金の神カナヤマビコノ神(金山毘古神)、カナヤマビメノ神(金山毘売神)を産んでいる。この〈金〉の神は収穫の季節の秋の神である。陽の極の夏から土用というクッションの働きを抜きにしてすぐ収穫の季節である秋・金に入ったことは、まさに「相剋の災」を越え得なかった理由になるのではなかろうか。それ故にイザナミノ神は火神に焼き殺されたのではないか、と考えられる。イザナミノ神は〈木〉の神であり、農作物の「実」、樹木の「実」そのものに象られるが、この自然界の実や種は焼畑という作業によって破壊され、「死亡」したと思われる。土用という過程を経ないで〈金〉、つまり収穫を取り急ぐのは、結果、火の神に焼かれて死ぬのも道理に適ったことと言えよう。『中臣祓抄』や『皇天記』の五行

と四季に対する解説は、〈火〉と〈土〉との関係に視点をおいて論じていて、イザナミノ神の産んだ神々の相生循環における〈金〉と〈土〉との順序に関わる問題の理解に資するところがある。

四　木神としてのオホケツヒメ

イザナミノ神とオホケツヒメとはともに直接に農業に関わる神である。『春秋繁露』巻十三・五行相（勝）生・第五十八では「木者司農也」と指摘しているが、オホケツヒメの五穀の産出とイザナミノ神の死が示す焼畑農耕の実現とは、ともにこの二神の農業との関係を示している。

また、『春秋繁露』五行逆順・第六十には「木者春生之性、農之本也。」とあって樹木と四季の春および農業とが深い関係にあることを指摘している。オホケツヒメは樹木の神で、五行の〈木〉に相当する神であるから農業を司る神とされている。このことはオホケツヒメが生成した、農業と深く関わる四季の神、また灌漑用水の神々、すなわちワカトシノ神（若年神）、ワカサナメノ神（若沙那売神　早乙女の意かともいう）、ミヅマキノ神（弥豆麻岐神）、ナツタカツヒノ神（夏高津日神）、ナツノメノ神（夏之売神）、アキビメノ神（秋毘売神）、ククトシノ神（久久年神）、ククキワカムロツナネノ神（久久紀若室葛根神）の性格から見ても知られるところである。

オホケツヒメは、イザナミノ神の生成の段においても、自分自身の生成の段においても、いずれも五行の相生、相剋の循環のなかで〈木〉の位置にあたる存在とされている。

焼畑農耕は火の発生に始まり、火は木を発生の基盤とする。イザナミノ神は木の神のオホケツヒメを産んだ後に火の神ヒノヤギハヤヲノ神を産んだのであった。五行思想の相生の原理は「木火土金水」と〈木〉を始めにして展開するのである。

雑草灌木は火によって焼かれ、その後に黒い土の大地が現われる。この土の上で農耕が実現した。火は事物発生の原動力であり、木はその基盤であり、起点であり、また母胎である。

イザナミノ神という母胎の死から農耕が生まれた。この化生神話は始終農業と関わるものである。この化生神話について、大林太良氏は次のように述べている。

女の体内から火の起源神話や死体化生（ハイヌベレ）型の作物起源神話も、ともに世界的には熱帯のイモ類、果樹栽培文化に中心があることが考えられる。ただし、日本の場合、ワカムスヒ、ウケモチ、オオゲツヒメなどの死体から発生したのは穀物であって、少なくとも純粋なイモ類栽培文化が背景となっているのではないことは

明らかである。このことは、カグツチ神話に焼畑耕作の習俗の反映を見る説がしばしば提唱されていることともうまく合致する。カグツチ神話の重要な構成要素の一つは古層焼畑栽培文化に遡るものであろう。

（『日本古代文化の探求「火」』大林太良編）

ここでは死体化生神話は五穀の発生に繋がるもので、その背景は火による焼畑耕作栽培文化にあることを指摘している。この火による焼畑文化がもたらした「死体化生」の観念は『古事記』の陰陽五行思想にも影響を与えている。「死」から「生」が生まれる。「死ぬ」ことによって「生きる」「発展する」。しかもその原動力は〈火〉であり、〈火〉による「殺戮」は「生」の原動力にもなる。このような観念は、農業においては一年四季の変化循環が自然の相生というよりも自然の相殺によって実現するものとし、五行においてはこの相殺はすなわち相剋の原理にあるとするのである。

四季の変化運行を五行の相剋の原理に入れたのは『古事記』のオホケツヒメの生神神話である。この神話は一年四季の変化運行を五行の相剋の循環に象って記している。

イザナミノ神は樹木の神であるが故に火神によって焼き殺されてしまった。この火は自然の火、雷による火であった。イザナミノ神は一本の巨木のように焼かれ、燃えてしまい、消えてしまう。その身体から吹き出したのは火であり、その身体が残したものは灰の土であった。この土を基盤に農耕を営むようになる。このように考えることによって、イザナミノ神の身体に生じた「火雷」「土雷」の存在理由も理解しやすくなる。

オホケツヒメがハヤスサノヲノ命によって殺され、その身体から桑や五穀が生じるのは、イザナミノ神が五行の神々を産んだことと同じ発想によるものと考えてよい。そして、このような焼畑農耕に基づく哲学理念はオホケツヒメの相剋循環の生神神話に現われている。

オホケツヒメの用例の〔第4例〕はオホケツヒメとハヤマトノ神が神々を産む話である。既に述べたようにハヤマトノ神はハヤスサノヲノ命の子のオホトシノ神の子であり、オホケツヒメは〔第1、2、3例〕に見えるオホケツヒメとは区別されるオホケツヒメである。このオホケツヒメはハヤマトノ神との間にワカヤマクヒノ神など五行の相剋の循環の環にあたる多くの神々を生成した。図示すると次のようである。

春・木　　土　　冬・水

オホケツヒメ　　ワカヤマクヒノ神　　ミヅマキノ神

ワカトシノ神

ワカサナメノ神

夏・火　　秋・金

ナツタカツヒノ神　　アキビメノ神

亦の名　ナツノメノ神

春・木

ククトシノ神

ククキワカムロツナネノ神

ここに見られる循環は五行の木、土、水、火、金、木、つまり冬、夏、秋、春という相剋の循環と全く同じである。これは『古事記』が理解した四季の循環運行の原理を表わすものと考えられる。この中で土、水、木の三者は具体的な元素であるが、夏、秋はこの元素が存在する過程である。つまりこの循環はつぎのような原理を語っていよう。

オホケツヒメという樹木の実、草木の種が土（ワカヤマクヒ）に埋められ、水をかけられ、夏の成長段階を経て、秋の収穫の季節に入り、収穫されてまた種になり、草木になる、という生成発展の過程である。

この過程はイザナミノ神の生成の過程とは異なり、生成後の段階、成長の段階に相応する。オホケツヒメの用例〔第2例〕に掲げたイザナミノ神の生神は相生の循環を作っていた。しかし、この順序でも〈金〉と〈土〉との位置の違いによって「火剋金」という相剋の兆しが現われ、この「相剋の災」によってイザナミノ神は亡くなったのであった。ところが〔例4〕では、オホケツヒメは焼畑農耕に基づく理念によって農作物生成の具体的な段階を合理的に表わした。しかも、この合理性を五行の相剋の原理によって示したのである。

この相剋の循環から、『古事記』の五行の原理に対する理解と『古事記』独特の自然観をうかがうことができるようにわたくしは思う。というのは、四季の変化運行を五行の原理で示す時は普通には五行の相生の原理による循環で示すのであるが、『古事記』のここでは普通と違って相剋の循環によって示しているのである。『五行大義』（隋・蕭吉撰）にはつぎのように記している。

天有五行、木火土金水是也。木生火、火生土、土生金、金生水、水生木。木為春、春為主生、夏主長寿、秋主収、冬主蔵、冬之所成也。（『古事類苑』方伎部）

ここでは「木、火、土、金、水」という相生の循環によって「春、夏、土用、秋、冬」という四季の変化を示している。

このように見てくると、相剋の循環になっているのは『古事記』独特の理解によると言わなければならない。そしてこの独特の理解は日本在来の焼畑農耕文化に基づくもので、火という原動力に対する理解から得た理念によるものであると言えよう。そしてこのようにしてイザナミノ神の相生とオホケツヒメの相剋によって自然神の生成の大事業は完成したのである。

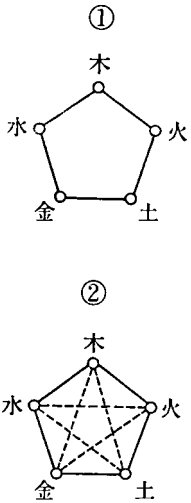
周知のごとく、五行は世界万物を生成するためのものである。この「生成」という事業には五行の「相生」思想と「相剋」思想という二つの循環が含まれている。「相生」あるい

は「相剋」のどちらか一方が欠けても「生成」の大事業は完成できない。「生成」は「相生」と「相剋」の両方が揃って初めて完成するものである。これが五行思想の基本理念である。図で示すと次のようである。

(1) 相生の循環（木火土金水）には相剋がある。

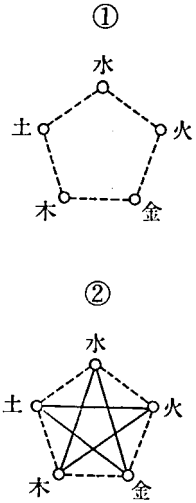
（——相生……相剋）

木生火　火生土　土生金　金生水　水生木

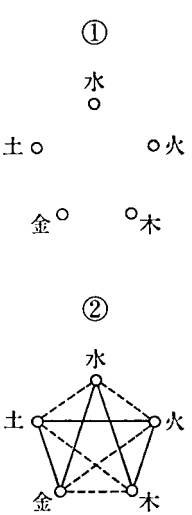


(2) 相剋の循環（水火金木土）には相生がある。

水剋火　火剋金　金剋木　木剋土　土剋水



(3) 相生と相剋の和は生成（水火木金土）となる。



このような原理はイザナミノ神とオホケツヒメの神話のなかに実現されている。イザナミノ神の相生が万物を作る五元素を生産し、オホケツヒメは四季の運行を主宰する相剋の四時、神々を生成した。このようにして天地諸神の世界が生成され、完成されたのである。イザナミノ神の相生とオホケツヒメの相剋が相俟って、初めて天地万物、諸霊衆神の生成が完成し、この事業が終わったのである。

ここでオホケツヒメが木神であることの徴証を付言しておこう。

オホケツヒメは、イザナミノ神の子である。イザナミノ神は国神系統に関わる神であり、国神系は農業と深く関わっている。『古事記』全体の記述から見れば、イザナミノ神とオホケツヒメは同じ系統上の神であり、相互の性質も同じく、少なくとも互に補充し、説明しあっているものであると考えられる。オホケツヒメはまさしくイザナミノ神の延長であり、その具現であると言ってよい。そこでイザナミノ神とオ

ホケツヒメがともに木神であるという根拠の一つを挙げよう。それは両神の産んだ神の数である。ともにその数は八である。

イザナミノ神（国土自然を産み終えた後に）
①トリノイハクスブネ　②オホケツヒメ
③ヒノヤギハヤヲ（ヒノカガビコ、ヒノカグツチ）
④カナヤマビコ　カナヤマビメ　⑤ハニヤスビコ
ハニヤスビメ　⑥ミツハノメ　⑦ワクムスヒ
⑧（トヨウケビメ）

オホケツヒメ（ハヤマトノ神との間に）
①ワカヤマクヒ　②ワカトシ　③ワカサナメ
④ミヅマキ　⑤ナツタカツヒ（ナツノメ）
⑥アキビメ　⑦ククトシ
⑧ククキワカムロツナネ

この八という数は重要なメッセージを伝えるものである。『古事類苑』が引用する「五行伝及白虎通」に「東方寅卯木也。生数三、辰土也、生数五、三与五相得為八、故木成数八也。」とある。また『太古暦伝』、『尚書』洪範が引用する『礼記月令』にも「木数八」という記述が見える。

イザナミノ神とオホケツヒメはともに〈木〉の神、樹木神であったから、その子（神避前後の子）の数が八であることは上述の五行の理念に適うものである。

このような考察を通じて、オホケツヒメは樹木神であったと考えられる。このことは『古事記』の五行の原理だけから導かれた結論ではない。オホケツヒメとハヤマトノ神との間に生まれた神々の五行の相剋の循環は、春、夏、秋、冬、土用という一年の五時を説明し、樹木および作物の一年中における成長、稔熟の変化を示していると考えられる。イザナミノ神、オホケツヒメに見られる在来の樹木信仰は――これは桑と五穀の生成に基づくものであるが、――このように抹殺と利用とによって五行の相生と相剋のなかに組み入れられていったのではなかろうか。

このような古代の樹木信仰が陰陽五行思想に組み入れられる歴史は、『日本書紀』の一書に見るように、非常に早い時期に始まったのではないかと思われるが、いくらその原理が厳密であるにせよ、そこにはやはり組み入れられる以前の痕跡を留めている。古代の樹木信仰もこの痕跡のなかで――わたくしは『古事記』を念頭に置いているのであるが――依然として基礎的な役割を果たしているのではないかと思うのである。

オホケツヒメ（木神）の開花、結実、枯衰という過程にさらに五行の相剋の理論をもって一歩進んだ説明を加える独特の発想は、『古事記』の、古代の日本人の独特の自然哲学の様相を示しているものではないかと思うのである。

以上に述べてきたように、五行思想の発現は『古事記』ではイザナミノ神の生神の段とオホケツヒメの生神の段に見える。イザナミノ神が火の神を産んで亡くなり、その身体から次々に金、土、水、木の神々が生まれた。火の神から木の神までの出生順序はほぼ五行相生の順序であるが、ここでは五行の神々が自分自身で次から次へと産むのではなく、すべてがイザナミノ神の身から生まれたことになっている。つまり、『古事記』のイザナミノ神の段に見える五行の神々は、木生火、火生土、土生金、金生水、水生木というような、前者が後者を産む関係にはなくて、この五種類の元素はみなイザナミノ神から生まれたものとされている。オホケツヒメの段も同じく、相剋の順序の神々はみなオホケツヒメから生まれたものとされている。その意味ではイザナミノ神とオホケツヒメとは神格化された陰陽そのものであるとも考えられるのである。

『古事記』が理解した五行は、万物を生むというよりも、万物のなかの何種類かのものを生むに止まっているように見える。これらの五行神は、海川山野草木人神という万物生成の後に生まれたものであって、かれらによって万物を成すという記述は見えないのである。かれらは万物を生む根源的なものとはされていなかった。

『古事記』の五行のもう一つの特色は、一つの元素のなかに次に来たるべき元素の性格が含まれていることである。カグツチは「火之迦具土」と表記され、これを火神の別名としたことから、火が土と関係し、むしろ火から土へというイメージが強いとも考えられるものであった。ここには「火生土」という五行の本来の理念がうかがえるのである。トリノイハクスブネノ神（鳥之石楠船神）、またの名をアメノトリフネ（天鳥船）という神が一方では〈水〉の性格を持っているが、一方では〈木〉の性格を持っているのもその例である。

樹木と農業の神であるオホケツヒメが産んだ神々は、また樹木と農業に関係のある神々であり、血縁関係を明確にする親子であった。

オホトシノ神の子孫とされるハヤマトノ神とオホケツヒメとの間にはワカヤマクヒノ神以下の土、水、火、金、木、土といった五行の相剋の理を体現する神々が生まれた。この五行の相剋を体現する神々はみなオホケツヒメの所産であり、オホケツヒメの粟とか五穀に関係のある神々であるが、この神々はイザナミノ神の生成した相生の五行の神々のようには活動しなかった。それらの神を産み出した親であるオホケツヒメも、イザナミノ神と同じように天地諸神の生成をこれで終わったのである。

『古事記』においては活動力のある、事績のある神々は、

五行の神々ではなく、陰陽の神である。陰陽の神は天神と国神、生と死、幽と顕の世界を創ったし、また五行の神々を創ったが、これらの五行の神々には万物を成す行動も事績も記述されていない。これらの五行の神々は万物ができてから生まれたものとされ、また、その出生によってその親なる神も使命を終結してしまうのである。このことは「太極生陰陽、陰陽生五行、五行生万物」という中国思想の理念と根本的には違わないものの、ここに『古事記』編纂者の陰陽五行思想を摂取しながらも日本列島に継承されて来た古代樹木信仰に惹かれた痕跡がうかがわれるように思うのである。

〔注〕

本稿では『古事記』のテキストとして、原則として日本古典文学大系本『古事記・祝詞』（岩波書店、昭和三十三年刊）を用いた。なお『古事記大成』（平凡社、昭和三十三年刊）の本文と索引を参照した。例文の（　）内の文字は原文割注の小文字を示す。

（1）倉野氏は大八洲国生成に次ぐ神々の出生、とくにイザナミノ神が火神を産んで神避してから、カナヤマビコ、カナヤマビメ以下生まれた神々について、このイザナミノ神の物語は中国古代神話の屍体化生説話の盤古伝説に関わるものとして捉えている。盤古伝説は『釈史』巻一所引の「五運歴年記」に次のように記されている。

元気濛鴻、萌芽茲始、遂分天地、肇立乾坤、啓陰感陽、分布元気、乃孕中和、是為人也。首生盤古、垂死化身。気成風雲、声為雷霆、左眼為日、右眼為月、四肢五体為四極五嶽、血液為江河、筋脈為地理、肌肉為田土、髪髭為星辰、皮毛為草木、歯骨為金石、精髄為珠玉、汗流為雨沢。

氏はイザナミノ神の化生神話はこの盤古伝説の影響を受けているのではないかと考えられているようである。さらに氏は、ヒノカグツチを火、カナヤマビコ、カナヤマビメを金、ハニヤスビコ、ハニヤスビメを土、ミツハノメを水、ワクムスヒを木としている。このなかでワクムスヒを木とすることには「多少の無理がある」が、五行の影響が見られるものと指摘されている。

（2）日本古典文学大系本では、イザナミノ神のこの段の注釈として、これが五行と関わるかどうかについては疑問が残っている、と述べている。

（3）たとえば阿部誠氏は「大気都日売被殺神話について」（『古事記年報』二十九、昭和六十一年度）のなかで、オホキツヒメの『古事記』神代巻への挿入の異質的要素を指摘されている。

（4）「風木津別之忍男神」の訓として、宣長の『古事記伝』ではこれを「カザモツワケノオシヲノカミ」とは読まず、「モツ」を「ゲツ」と読んで、「こは訓も名意もいといと心得がたし。（中略）訓木以音。こはいと心得ず。字の誤あるべし。（中略）もし訓木ならば云々とこそ有べけれ。此注左右に誤あること疑なし。」と言っている。

これに対して倉野氏は『古事記全注釈』で、「岩つつじ木丘（モク）咲く道を」と「木」を「モ」の仮名に使っている例があるか

ら、ここの「木津」を「モツ」と訓むことにすると述べている。その名義については、「〔風もつ〕というのは、屋根が風に吹き飛ばされないように支え持つ意、つまり屋根を持ちこたえる神と解してはどうであろうか。」とされている。また、氏は、石土毘古神からこのカザモツノ神までは古代の竪穴住居に関する神々であるとし、石土毘古神と石巣日売神は竪穴住居の床面及び壁面等とかかわり、大戸日別神は住居の出入口、天之吹男神は住居の屋根茸き、大屋毘古神は住居の屋根の完成（住居完備）とかかわるものとし、そして風木津別之忍男神は住居の屋根の風に対する補強として考えられているようである。

〔附記〕本稿は、一九八九年に広島大学大学院社会科学研究科に提出した博士論文『記・紀神話論と神道論の展開』の第一章第二節・第三章第一節をまとめたものである。